

アートは地域を再生する

日本有数の豪雪地帯で過疎集落が山間地に点在する越後妻有。大地の芸術祭は、自然の豊かに残った広大な地域を舞台に3年に1度のトリエンナーレとして開催されてきた。その総合ディレクターを務めるのが北川フラムさんだ。昨年は、第4回目の芸術祭を成功させただけでなく、大阪を開催地に都市の芸術祭「水都大阪2009」を演出。さらに今年、瀬戸内海の離島を舞台とした「瀬戸内国際芸術祭」を開催する。同氏の手で地域を主役とする現代アート展が次々と実施されている。その地域への想いについて語ってもらった。

グローバリゼーションに抗する

西村○今、全国で創造都市というところが広く言われるようになってきて、北川さんのやられてきたことが注目されるようになって来てますね。そもそもアートをやっている人は、あまり町や村と関係なく純粹に芸術活動を追及する人が多いと思うんですが、北川さんが地域を舞台にアート活動を始めるきっかけを教えてください。

北川○もともと、ぼくはアート分野の人間で、アート側の発想をするこ

事が「こんなのはだめだ」っていったんだけど、粘り強く実施したら、知事は今年度の基本施策にしましたね。

ともありますが、通常のものの方をすることが多いのです。この20年間思ってきたことは、世界中が同じになってきちゃった、ということですよ。いわゆるグローバリゼーションと言われていることですが、今の価値観で言えば一番新しい情報のあるところに最短でアクセスすることだと思ってるんですね。それは時間があれば携帯のメールを見たり、朝から晩までインターネットを見るとか、要するに新しい情報を調べていないと落ち着かない。それを街で言うと、汐留、ミッドタウン、六

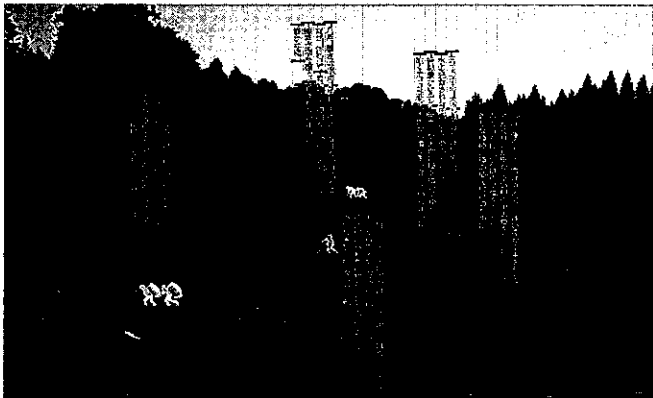
本木ヒルズができていくような集中型の再開発が行われる。これらは1カ所に集中すれば情報が集中するからだと思っんです。そのような方法では銀行や一般企業の競争と同じように、一人勝ちしできないのです。まちづくりでもそうで、一番お金のあるところ以外は、全部だめになっっていく。ぼくはこれでいいんだらうかと思ってるわけです。この間、大阪の水都再生プロジェクト「水都大阪2009」*に関わってきて思ったのは、大阪も東京を追っかけるからうまくいかないですね。橋下知

ものを寿いでやっていくしかないわけで、その地域の資産目録を作る手立てにアートがなると思ってるわけです。

大地の芸術祭におけるアート

西村○ぼくも同じようなことをやっているわけです。まちの宝を探してリストづくりをしている。われわれ

イリヤ&エミリア・カバコフ「柵田」
スポンサー：株式会社ベネッセコーポレーション 撮影：安齋重男



れの場合は、物理的な資産をリスト化するのですが、アートと地域資産の間にはどのような接点があるのですか？

北川○一番わかりやすい例は「大地の芸術祭」のこの作品（イリヤ&エミリア・カバコフ「柵田」）ですね。川向こうには柵田に田起こしから種まき、収穫までの高さ3mの彫刻が配置されて、手前にはスクリーンがあつて春夏秋冬の柵田の風景に合わせた詩が書いてある。いわば立体絵本になっているんです。カバコフというロシアのアーティストは、雪国で柵田をがんばって作ってきたという農民の営みを表現しています。

この福島さんという柵田の農家は2000年に柵田をやめようとしていたんです。その柵田を使わせてくださいと頼んだんですが、最初はいい顔をされなかった。もう柵田につかわないにしても、わけのわからない現代美術につかうなんて冗談じゃないと思つたようです。だけど、カバコフさんやそれをサポートする人たちは、このような条件の悪い土地で柵田を作ってきたことはすごい

など、それを寿ごうと思つてやりたいわけですね。そこで岩波新書「日本の農業」（原剛著）一冊を英訳することから始めたんです。農業を理解することから始めて、柵田での創作表現を説明（稲作の5場面を、川をはさんだ対面から見の設定）した。福島さんは、その勉強をみて柵田の利用を承諾した。そして、しだいに長く続けてほしいという気持ちを抱き始めるんですね。実際に、2000年で耕作をやめないで2006年まで田んぼを耕作し続けたんです。

今までのように、セザンヌが山を描いたというだけじゃだめなんですね。やはり、人が来て、現場を見ることによって、柵田の大変さが伝わるわけです。だから、このような場のアートというのは、アートが主人公じゃなくて、アートは風景を見せるための仕掛けとなる。いわばキャンパスに点を打っているようなものです。そういうことをアートは地域でやって来たんだと思っんです。アーティストの、いわば現実的な価値がない妄想を、地域の人々に対し説

得して葛藤しながらやってきたわけですよ。

西村○そのようなアーティストは元々、専門に地域での表現をやってきた人々なんですか？ 人には適性があると思っんですけど。

北川○いや、専門じゃないんです。優秀なアーティストは現場を見て考えるんですね。なぜかという、20世紀は都市の時代で、都市がうまくいけば社会全体が上手くいくと思つてきた。だけど、上手くないわいわけです。彼らはパリやロンドンに住んでスーパースターかもしれない。しかし、親や兄弟、知人の住む地域が過疎になっていく事に直面している。だから、日本の過疎地である妻有にも興味はあるのです。力のあるアーティストは、地域に入ってくる変わりです。都市ではニッチ（特定の美術愛好家を対象にした小市場）を開拓するしかないですね。都市が病んでくると、美術から明るさがなくなりまますね。これはアーティストにとつても楽しいことじゃあない。ところが、妻有では皆が手伝ってくれるわけです。

●北川フラム氏
アートフロントギャラリー代表。新潟県立高田高等学校、東京芸術大学美術学部卒業。アートディレクターとして国内外の美術展、企画展、芸術祭を多数プロデュースする。1997年より越後妻有アートネットワーク整備構想に携わり2000年から開催されている「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」では総合ディレクターを務める。



西村○アーティストの側でも、ポジティブな面が出てくるわけですね。北川●そう、いい形で作品が変わるんですね。そのような体験があると、アーティストも積極的に参加します。過疎などの地域問題に関わる欲びをアーティストたちは感じています。ですから、キャンパスに点を打つことによって、キャンパスをいかして行く。そのような事をやりだした。それが今、地域づくりにアートが入っている理由ですね。

整理すると第1にアートは地域で棚田のような宝を発見するわけですね。第2に他人の土地で作品づくりをするには、地域を学んで熱意を伝えていかなくてはならない。第3に土地の人たちは様々な技能を持つ「百姓」ですから、みかねて手合いに入る。その瞬間に、イリア&エミリア・カバコフの作品だけ地元民の作品に変わるんです。見物客が来るでしょ。そうすると、作品について語り、地域について語る。それは楽しいわけです。じいちゃん、ばあちゃんが元気になってくる。僕らの指標は、じいちゃん、ばあちゃんが

元気になることだと思っているわけですね。

西村○地域の人から見ると、最初は変な人たちがきたという反応ですね。

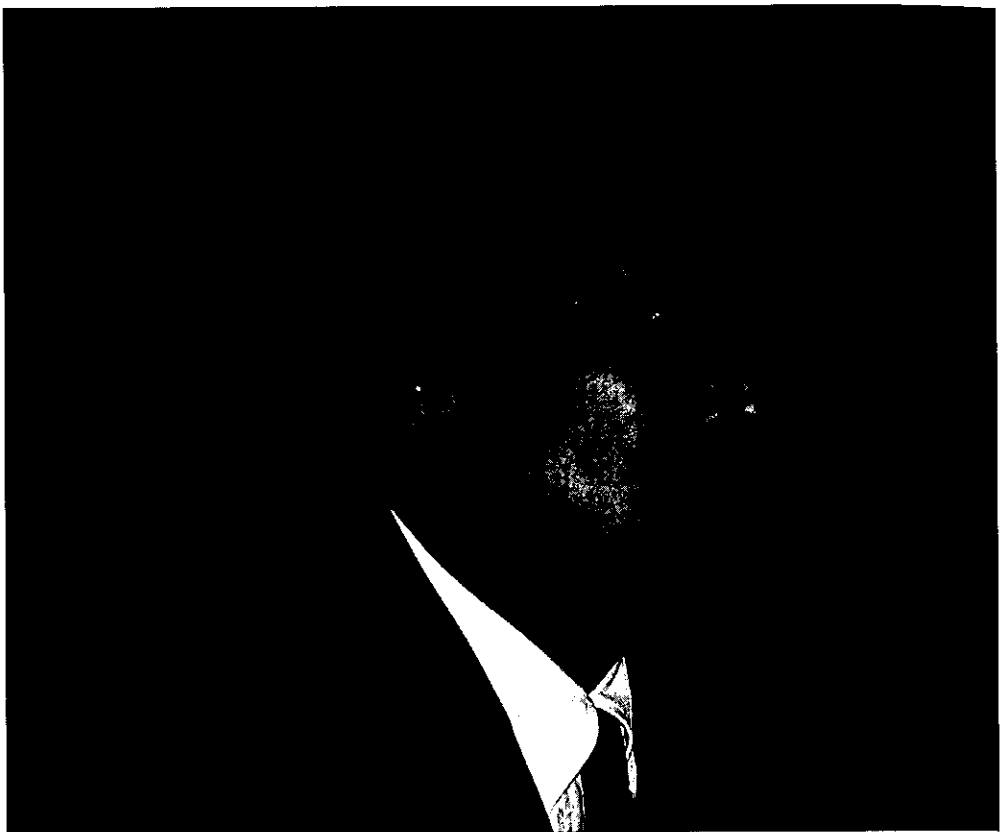
北川●ピアスの男がくるとかするわけですから、地域の反発は並じやないですよ。その落差をアートは超えますね。

西村○なまじ用途があるものだと、機能しないですね。

北川●それだと、どれだけ儲かるかとか、別種の分野になってしまます。アートって赤ん坊みたいなものですね。役に立たない、手間隙かかると、みんなで面倒見ないとしょうがない。みんなでメンテナンスするのと人と人がつながりますね。地域の人がつながるいい媒介物ですね。だから、役に立たなく手間が掛かるのがいいんです。

西村○すると、都会より田舎のほうが、人が多いより少ないほうがやりやすいですね。

北川●もうひとつあって、ぼくは妻有に1996年から入ったんだけど、地域に専門家や若い人たちが必



○西村幸夫氏
東京大学都市工学部教授。福岡県福岡市生まれ。福岡県立修猷館高等学校卒業。東京大学工学部都市工学科卒業、同大学院修了。明治大学助手、東京大学助教授を経て、1996年、東京大学教授。この間アジア工科大学助教授、MIT客員研究員、コロンビア大学客員研究員、社会科学高等研究院客員教授などを歴任。

要だと思っていた。だけど、ぜんぜん理解してなかったことは、都市の人間のほうが田舎を探していることです。今では学生だけでなく大手企業の社員や経営者も手伝ってくれるんです。なぜかといえば、グローバリゼーション社会ではどれだけががんばっても、ある日突然会社を買収されたりつぶれたりするわけですね。つまり、都市の中で人間は因数ではない。ところが、地域では人を必要としている。この傾向をJTBは的確につかんでますね。観光業から斡旋業に変わると思えますよ。

皆、第2のふるさとを創ろうと思っっているんですね。その底流はものすごく大きいんです。だから今、瀬戸内国際芸術祭2010を始めましたけど、ボランティアが5000人あつという間に集まる。東京が2500人、大阪が2000人、神奈川が50人という具合です。みんなが自分のリアリティある場所を探そうとしている。その動きが妻有を支えている。

西村○それはよくわかりますよ。ただし、アートでなくてもいいかもしれない。たとえば、草刈り十字軍と

かね。日本中、いろんな形で動いているんじゃないかと思うんです。

北川●それはまったくそのとおりです。ただしアートというのは、直感的に地域の面白さを見つけるのが上手いんですね。

西村○でも全く外れるということは無いんですか？

北川●いいコーディネートとアーティストがいれば、それなりに修正は必要ですが、外れないと思います。学生がやればいいと思っっているところは、上手くないかと思っますが。やはり本当に力のある人たちが参加する必要があります。

西村○たとえばどこかの美大生を連れてくるだけじゃあだめですか？
北川●それはその瞬間はよくても、質というものがあつて、面白く見せなければだめです。美大生がやっていて上手いききだしているところもありますけど、2、3回で潰れますね。面白くないもの。

美大生は自分の表現をしようと思っうでしょ。だけど、本当のプロは、その背景を上手く見せるんですよ。作品の必然性を見せるんです。それ

が大きな違いですね。

食や農とアートは繋がる

西村○いま、いろんな自治体がアートを上手く活用しようと思ってるでしょ。そうするとアートだらけになりそうな気もするんですが、これからのような方向に行くんですか？ 日本中、妻有になるのも変な感じですね。

北川●その場合、大きな要素は「食」ですね。アートより食や農です。ほくらはアートをやりながら、だんだん食や農にシフトして行っている。地域の拠点施設「まつだい農舞台」にはハイシーズンには1日に3台のほとバスがきますが、それなんかはアートと食事と温泉が目当てです。今、妻有でも棚田オーナー制をやっていますが、農や食はすごく重要です。食には普遍性があります。地域の手いものをその場所で食べると本当に上手いんですからね。

西村○われわれもそうなんですよね。古い町並みを見に行っても食に魅かれますよね。

北川●食は飽きないですよ。都市でいてくれることや集落が残ることですね。20年先が考えられない状態になっている地域に若い人が訪ねてきて活動してくれると、嬉しいんですよ。そこでは大量消費から地域ならではの楽しみへと価値観が移動してるわけですね。お金はそんなにいらないうちは思っていないけど、少しずつ変わってますね。

西村○このような議論は都会側から行うから、田舎は職がない、職がないからダメだという発想ですよ。地域では最近、職をつくりだす動きも見えていますね。従来にはない農業を志すとか、農作物をインターネット販売して消費者と直接につながる

北川●最近調査したら、大地の芸術祭事業関係では妻有だけで恒常的に100人働いています。農家レストランのようなものも誕生している。都会の人も地域に行きたがっている。西村○一番不便なところに最も魅力が残っているから、行きたがる。だから、大逆転が起きる可能性がありますよ。

北川●それにこれから食料の問題が

の住民が何千万人いても、行ける時にそれぞれが地域に行けばいいんですよ。そうすれば、各地の個性が輝くと思います。

西村○これからは都市も大変難しいのではないかと。大都市の周辺部や地方都市の中心市街地でクリエーティブなものを求めたい場合があるでしょう。

北川●中間的な都市でいうと、北本市などは中途半端なベッドタウン都市だけれども、その中途半端に見える特色をうまく使えば面白くできると思う。そこで六本木ヒルズや妻有を狙っても仕様がでない。

西村○当たり前の郊外都市のよさがあるということですね。北川さんのアーティスティックな眼で見て面白いところが見えないと、なかなか可能性を感じることはできないと思います。

北川●専門家のアドバイスは必要だと思いますよ。そうじゃないと、大阪が東京を夢見たのと同じような事になってしまいますね。だけど、そうじゃないぞと、川にお尻向けて排水していたのをやめようと、それは

大変になるから、まずまずそうなる可能性はある。ほくらが頑張ってきたというより、必然的な動きが都市と地域の間に起きてきたということ、大地の芸術祭がそこそこ成功したと言われる一番大きな理由だと思います。

芸術祭の思想

編集●芸術祭は妻有だけではなくて、大阪や瀬戸内に飛び火していますよね。新潟は北川さんの出身地ですが、他地域ではまた異なった考え方があっていいんですか？

北川●いや、同じですね。面白いことをやればいいんだと思ってる。違う角度でいえば一番重要なのは行政と仕事するということです。行政と組んだ途端、地域の全員が反対してきますから。この「反対」が重要です。仲間内だけではだめですね。行政と組んだときに起きる大反対をどうやって超えていくかというところで、こちらは非常に鍛えられます。鍛えられることによって普遍性みたいなところになりますよ。それからじいちゃん、ばあちゃんが思っ

大阪は水運を中心に形成された都市なんだから、水辺を活用したレストランなどが開店できるように規制緩和したんですよ。それにはプロや外部の人材が必要ですね。いままでは、イターン、Uターンを美談として言い過ぎましたね。そうではなくて、他者を受け入れるか受け入れないかは、ものすごく大きな差だと思う。

他者を受け入れないところはだめだと思ってる。大阪は大阪人じゃないとだめだと思ってる。今回は他者（北川）を受け入れたんですよ。失敗したらその責任を取らせるような責任者（他者）を入れないと、思い切ったことはできませんよ。女性を入れるとまちづくりは成功するといわれるけれど、やはり男はこれまでの経緯がありますから、新しいことはできませんよ。

西村○それと女性は他所から嫁いで来てて、他を知っていたり、これまでのつながりが無いとか、肩書きが関係ないですからね。

北川●他者を入れようとしないとこれは大変ですね。

西村○ある程度厳しいところが、わたっていることにつながらなければだめだし。行政が入ると壁が高くなるわけ、でもこの高さが重要です。やる者同士でやるのもいいけれど、それだと普遍性には行かないと思います。反対者と一緒にやれるというところは一番面白いですよ。

西村○最初、十日町市の方から何かやってくれと頼まれたわけですよ？

北川●そうですね。それは合併施策ですよ。その合併施策とぜんぜん違うことをやったわけですよ。人がこないですよ。効率がよいかから1カ所でやった方がいいんじゃないかという意見があったが、絶対嫌だと断ったわけですよ。地域にある200の集落を活かしてやり続けようという主張した。もし集落でやるインパクトが無かったら、やめた方がいいと思いたしたしね。その集落って、地域の人にとっては本当に大切だと思ってる。昔は雪に閉ざされて集落ごとに孤立しながら頑張ってきたわけですよ。車社会になって道路がつくれないうちから町の中に来いといわれても、そうはいかないですよ。「根」がなくなりますよ。ほくらは根がなく

らをもつかむ心境で変わるんですよ。ですから、21世紀は田舎がものすごく魅力的になって、もう一回帰帰するような時代じゃないかと思えますね。

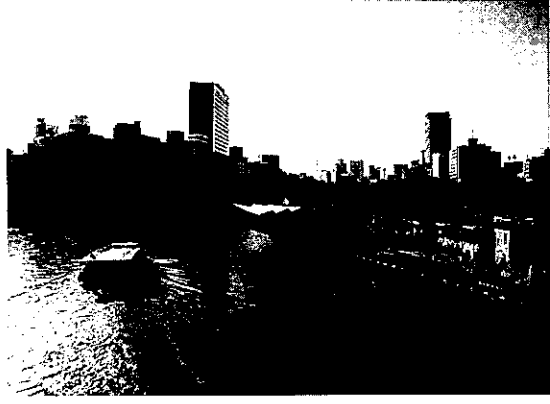
北川●ほくもそう思いますね。

西村○まちづくりやっていますと、気持ちはそうであっても、気持ちだけは食えないのではないかとこのところがありますね。それはどうしたらいいとお考えですか？

北川●それは面白いことがあればいいと切り替えることが大事。大げさに言えば田舎では10万円あれば生きて行けるわけ。10万円、十分楽しいんですよ。楽しさで変われるかどうかですね。

西村○その程度の収入でよければ、選択肢が増えるということですね。

北川●これまで楽しいことをやってこなかったんですよ。ほくは妻有に入ったときに考えたんですが、農業のことは何も知りませんでしたからね。地域のじいちゃん、ばあちゃんには若い人と同じで興奮や刺激が好きなんです。消費も好きですよ。でも、本当の喜びは子どもたちが元気に



水都大阪2009会場風景

なると人間ってだめになると思うので、それが頑張ろうと思った動機ですね。

西村○そうですね。アーティストという根のないボヘミアンだと思っ

西村○展示は会期が終わると撤去されるのですか？

北川●撤去されるものもありますが、半分は残っています。去年(2009年)は、展示作品が350です。いま、事務所まで打合せしているオーストラリアの展示は本場の限界集落の廃屋を利用してやっただけです。

西村○それをアーティスト・イン・レジデンスでやっているわけですか？

北川●そう。それを大使館が一生懸命コーディネートしているわけですよ。それでオーストラリアの外相がわれわれは新潟の山の中でこういう事をやりますと宣伝してるんですよ。

西村○先ほど時間は宝だとおっしゃったけれど、われわれが町並み調査に行くとき、春に花が芽吹き満開になる様子を克明に語ってくれるわけですよ。われわれも行けばその時点で花はみることができないけれど、経過は見る事ができない。普段はあまり語られないんだけど、地元について継続してみたいのと、見えないものがあるのですね。

西村○ぼくなんかも建築で一番感動するのは民家なんです。その生活全体がきちんと見えるのは農村なんです。だから農村の中に人間の全体像を見直せるものがあるって、そこに帰帰していくということなのかな。

北川●われわれは記号になった断片で自分を語っているけれども、生理で語ってないものね。その生理が今すごく重要なんじゃないですか。

西村○北川さんのような立場は美術の世界では少数派ですか？

北川●そんなことはない。美術だけなんです。他者と違っていいのは、ぼくがなぜ美術の世界にいるかといえ、人間はみな違うものだからってことを表している世界だからです。算数できないやつが美術やっていますから。算数できなくなつていいじゃないか、いろんな人がいるんだってことをいうわけです。

西村○なるほど。みないろいろチェックされてきているわけだけれども、クリエイティブティってチェックしようにない。

北川●そう、まんだらじゃないとなつて、誇りが意識されてくる。そのニテイがなくなつて、誇りまでなくなつてきましたね。その最後の誇りを奪うことが、ぼくらのやれることかもしれないと思つてますけどね。

西村○それは普遍的なもので他の場所でも応用可能だということですね。

北川●それは絶対普遍的なんです。その土地で生きていくためのものすごい工夫をしていますからね。それはもう感動的なんですよ。

アートは生活を表現する

西村○北川さんご本人のことを聞きたいんですけど、芸大に行かれてアーティストの側面があるじゃないですか。それと生活者としての側面はどういう形で結びついているんですか？

北川●良いことを聞いていただいたんですけど、美術ってアルタミラやラスコー以来、人間の手形だったり足跡だったり、当時の大地や自然との関係性を表わしているんですよ。

北川●それだけ危機の時なのかもしれないですね。

西村○各所でこのようなことをやられたら身体が持たないんじゃないですか？

北川●きついですよ。瀬戸内で国際芸術祭(開催期間2010年7月19日~10月31日)の準備をしています

が、東京との往復です。可能な限りぼくが行つて説明しています。大体2時間ぐらいの船の帰り時間までの間、島民の方からはこれまでの文句です。でも、島がちょっと脚光を浴びて嬉しいわけ。もう3回ぐらい島の集会所で説明しています。帰るときにはあちやんに頑張つてといわれると、過疎の島に対するある種の介護になつてようような気がしますものね。

西村○北川さんの迫力でやられると、そんな気になるんでしょうね。だから、パーソナリティの影響もある

しかし、明治になつてね、美術って「彫刻」「絵画」だと思つちやつたわけですよ。殖産興業振興の一環で美術も国がやらなくちゃいけないと思つたのは偉いけれど、美術館や学校をつくつてやれることはマニユアルでしかないし、展示できる程度のものでしかない。一番人間にとつて面白かつたお祭りとか、庭とか床の間とか衣服とか食べ物、芸術じゃないから大切じゃないとしやつたわけですよ。だから、美術って分らないって言われますよ。音楽は好き嫌いで言いますよ。ぼくが講演会でこの1年間、年賀状でもいいから絵を書いた人いますかと聞くとせいぜい5人だけです。つまり、生活と異なるショーウィンドーのものになつちやつたわけですね。これは駄目だと思つて美術と社会をつなぐ活動をやりたいと思つたんです。ですから明治に決められた「美術」によつて私たちは楽しみを喪われてきたことですね。わたしもまちづくりを

北川●いや、やはり根拠がありますよ。

北川●いや、やはり根拠がありますよ。

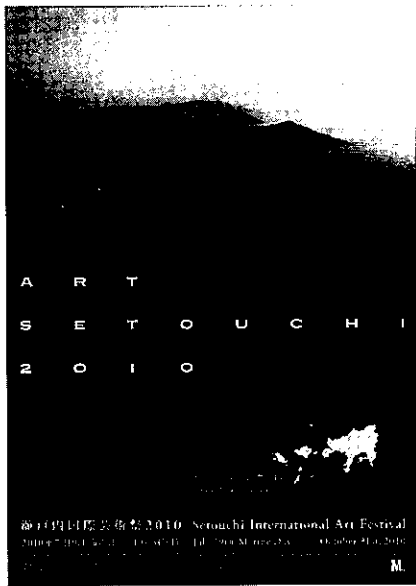
北川●いや、やはり根拠がありますよ。

西村○こちらがリストペクトすることが大事ですね。でも、行きにくいところばかりですね。

北川●人口の減り方は妻有なんでもんじゃないですよ。子供が高校生になると一家をあげて島を離れて本土に移住するんです。犬島は現在60人(精錬所のあつた時代は4000人だった)だけど、平均年齢75歳、もう10~20年先は考えたくない。もつとすごいのはハンセン病患者の隔離された唯一の島、大島ですね。ちょうどこの前、人口100人を切つたんですよ。全員、子供がいないわけですよ。ハンセン病は伝染病じゃないとわかつて、全く故郷に帰れるんですが、やはり帰れないですよ。みんな

やつてきて、最初は建築や町並みの物理的空間でしたが、やつていくとその生活が面白いし暮らしを見ないと物理的空間だけを見ても意味が無いわけですよ。そうして見ると食があつたり祭りの時にドラマティックに町が変わつたりするでしょ。

北川●まったく同じことで、分業で狭くなつた活動の場を生活全体の中でつかみ直す必要があるわけで、人が好きだつていうことを空の高さ海の深さで言いたいのに半音の音階で表したり、半角のハートマークで表すようになつたね。(笑)五感が全くダメになつて、記号で表すようになったね。それが一番問題だと思つたんですよ。その時、もう一度生活の手触りでなにかやつていった方がいいなと思つた。好きなアーティストは誰かと聞かれれば、ポナールとかモネだつていいですよ。だけれど、そんなことを良いつていても仕方が無いので、自分のやることは違ふなと考へている。もつと手触りとか匂いとかを含めた、みんなが一緒に楽しめることからやつていった方がいいと思つた。



瀬戸内国際芸術祭ポスター

な大島で死にたいと思つている。だから、入所者たちは10~20年後も島で何かが行われているという実感が持てれば嬉しいというんです。若い人達が来て何かやつてくれると、もしかしたら20年後も島は大丈夫じゃないかと希望がもてる。アトつてそのくらいあつてもいいじゃないかと思つたんですよ。今、妻有では恒常的にぼくが行つて産直などの地域活動を行っているんですが、大島でもそのようなことが起きてくると思つたんですよ。

編集●過疎の山村と離島という現代日本の最もシボリックな場所である芸術祭をやることになるわけですね。

北川●いろいろなところから声がかか
るけど、そのようなところでちゃん
とやりたいと思います。壁は高いか
ら、そこでやれば普遍性が少しは
見えるかもしれないと思ってるわけ
です。大阪でも橋下知事がやめると
言い出して大変でした。腹が立つた
けど、知事は美術で楽しい思いをし
たことがないんだらうから、楽しい
思いを経験してもらおうと思いまし
たね。開催してみても中之島にたくさ
ん人が集まったので、水都大阪と言

れをやれたのは、妻有で猛烈に反対
した人達とやった経験があるからで
す。そんなのでだめだと言ったら、
こっちが説得できないからやめるこ
とになるんです。例えば杉浦明平が
『フリソダ騒動記』に地元を説得でき
なかつたと書いていますが、説得で
きないのは与件じゃないかと思っ
てるわけですよ。その中でどうやる
かしかないのに、これまでの運動は
啓蒙なんですね。わかってくれない
からっておしまいにする。妻有で言
えば1500年の歴史があるところ
で生きてきた住民たちは、簡単に説

得されるくらいヤワじゃないだらう
と思いますね。極めて保守的なじい
ちゃんが、ぼくは偉いと思うものね。
西村○しかし、それはなかなか大変
ですね。今日はありがとうございま
した。

●創造都市の行方

西村幸夫

このところ国を挙げての創造都市ブ
ームである。横浜の文化芸術創造都市

理大臣認定(2004)や札幌の創造
都市宣言(2006)、大阪(200
7)そして金沢(2009)での世界
創造都市フォーラムの開催など、トッ
プランナーの肩に力が入っている。出
版の世界でも「創造都市」を表題に掲
げる本だけでも十指に余るほどの盛況
を見せている。

国でも文化庁が2007年度より芸
術文化創造都市部門の文化庁長官表彰
を行うようになり、これまでに横浜・
金沢・近江八幡など12都市が表彰を受
けている。国際的に見てもユネスコが
文化の多様性推進の一環として200
4年より種々の分野における創造都市
の世界的ネットワークを提唱してお

*1 「水都大阪2009」は、2009
年の8月22日から10月12日まで、大阪市内
を流れる水の回廊(大川・東横堀川・道頓
堀川・木津川)を中心に、アートイベント
や橋梁ライトアップ、水上カフェ、川床な
どが展開された。

代美術の国際芸術祭。副題は「アートと海
を巡る百日間の冒険」。期間は2010年
7月19日(海の日)から10月31日まで。会
場は、直島、豊島、女木島、男木島、小豆
島、大島、犬島、高松港周辺。北川フラム
さんは総合ディレクターを務める。

*2 瀬戸内海の島を舞台に開催される現
在、これまでに21都市がネットワーク
に参加を認められている。うち日本で
は、神戸・名古屋(デザイン)、金沢
(クラフト)が選ばれている。

こうした熱気は、視点を変えると、

産業や産業者を引きつけるための戦略
としてさまざまな自治体から熱い目で
見られるようになったからだともい
えるし、まちおこしのネタが尽きかけて、
アートにまで手を伸ばしていると皮肉
な見方をする向きもあるだろう。

アートによるまちづくりの火付け役
でもある北川フラム氏と対談してみ
て、真剣に向き合うならばモダンア
ートを通して、田舎暮らしといった生活
のありさまがひとつの作品、あるいは
絵画のようなものとしてあぶり出され
てくるということが起こりえるとい
うことがわかる気がした。北川氏の根底
にある生活者としてのパトスが、こ
うした奇跡をおこさせるということも理

解できた。アートイベントを実現にま
で持っていく力業は、まさしくまちづ
くり人の熱意と同じものなのだ。

北川フラム氏の行動の原動力は、世
間の創造都市ブームとはかなり違うと

のは手作りの生活をいとおしむ気持ち
とそれを守らなければならないという
義憤である。つまり、これはまちづく
りなのである。

越後妻有を簡単に模倣できると考え
てはいけないのだ。むしろ無手勝流で
妻有へ飛び込む心意気とそれを実現へ
至らせる熱い想いこそ、見習わなけれ
ばならないと思った。そっだとすると、
まちが浮上する可能性はアートに限ら
ず随所にあるともいえる。北川氏の予
想は「食」と「農」である。そしてこ
のふたつは、私自身もこのところ深く
考え始めているものでもある。創造都
市もこうした方面へ展開できれば、ま
た一段の高みへ至るように思える。